

From Karakuri to Modern Technology

A Crucial Transition in 19th-Century Japan

1984
作品ナンバー0237

〔文明開化—^{からくり}奇巧から科学技術へ—〕

第28回日本紹介映画コンクール金賞 イラン国際映画祭入賞

幕末の開国以来100年、日本は西洋から輸入した工業技術を消化し、急速な工業化を成し遂げた。それを可能にしたのは江戸時代からの富の蓄積、教育の普及、手工芸の発達という土台があったからである。日本が幕末どのように近代科学技術を受け入れ、消化したかを、からくり師田中儀右エ門を通して解きあかす異色作。



福岡県八女市の祭りの人形芝居。その人形「からくり」を考案したのが田中儀右エ門である。1799年、九州久留米のべっこう職人の子として生まれた儀右エ門は、若い時から、からくりの考案に才を見せ、京都に店を構えて様々なヒット商品を発明した。さらに彼は職人でありながら蘭学を学び、西洋の科学を知って万年時計を作り上げた。これは、伝統的な工芸美と科学的な正確さを合体させたものだった。1854年、ペリーの来航によって幕府は開国に踏み切った。この時ペリーのもたらした蒸気車の模型と電信機は日本人を驚かせたが、儀右エ門は早速資料を集めてこれらを試作してみた。しかし、実物の蒸気機関の製作は難しく、日本最初の蒸気船を完成するまでには試行錯誤が重ねられた。

開国後、先進諸国を訪れた幕府や諸藩の使節団は、彼我の技術に100年の隔たりを認め、近代産業の設備の輸入に踏み切ったのだった。明治新政府も同様に工業化が必要であると考え、産業のあらゆる分野に外国人技師や学者を雇い入れ、外国の設備機械を輸入して急速な産業立国に努めた。文明開化の波は、風俗や景観にまで及んだ。水上には蒸気船、陸上には蒸気車がわがもの顔に走った。東京に進出した儀右エ門は、工部省の依頼で各種の電信機を製作、その工場がのちに、日本最初の重電メーカーに育っていく。明治政府は、初等教育を義務化、外国人教師を招いて指導的技術者の育成に努めた。

記録

35ミリ

カラー／29分

英・仏・独・伊・西・
葡・露・インドネシ
ア・タイ・アラビア・
中国語版

■企画

国際交流基金

■監修

東京大学教授

芳賀 徹

スタッフ

■製作

村山英治

福岡順子

■脚本

花崎 哲

米内義人

■演出

米内義人

■撮影

福井久彦

■音楽

長沢勝俊

■照明

監物邦雄

■解説

K・マクドナルド

(英語版)